

20世紀前半の芸術批評における身体性と有用性

川里 卓 哲学分野・専門 博士後期課程2年

本稿は、「パリ国立図書館所蔵のメルロ＝ポンティ手書き草稿の調査と日本哲学との対比」を題目として助成を受けた調査の報告である。そのなかで、今回の実際のフィールドワーク調査では、パリ国立図書館においてフランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティおよびアンリ・ベルクソンの手書き草稿の資料調査を行った。

メルロ＝ポンティの草稿には著作権があり写真撮影を行えなかったが、刊行されていない資料をいくつか手書きで写すことができた。メルロ＝ポンティの資料に関しては、草稿の数が多いため全てを手書きで写すことは不可能であった。それゆえ、彼の主著である『見えるものと見えないもの』に所収されていない資料を中心にノートに書き写した。パリ国立図書館で収集した資料は、時間の都合上まだテキストデータに起こしていないが、現在の論文を執筆した後で、文字に起こし、今後の研究に生かしていく予定である。

また、ベルクソンの草稿に関しては、写真撮影が許可されていたため、彼自身が絶版とした著書『持続と同時性』、『道徳と宗教の二源泉』および『思考と動くもの』の資料を収集することができた。ベルクソンの草稿にはほとんど修正が見られず、彼がほぼ一気に著作を書き上げたという点を証明するものであった。

ただ、それでもいくつかの修正や削除した部分が存在しており、今回の調査では主にその箇所を写真で撮影した。例えば、『道徳と宗教の二源泉』では、「情動」について論じた箇所があるが、ベルクソンが本文から削除した箇所で、「情動」と「感情」を明確に区別している点を確認できた（これは出版された内容では明確に述べられていない）。

この調査の成果は、「情動」と「感情」について扱った論文にすでに反映されている（この論文は2018年度の中部哲学会の『年報』に投稿した）。また、ベルクソンの『思考と動き』に所収されている「ラヴェッソンの生涯と業績」の草稿に関する調査内容も、2018年12月8日に愛知学院大学で開催された、比較思想学会東海支部研究会の発表において、この論文の見解を支持するものとして用いた。

なお、助成対象の調査に先立つ2018年9月3日～4日は、別経費でドイツ・マールバッハにあるドイツ文学資料館において、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーに関する資料調査を行った。ドイツ文学資料館における調査では、一日半資料館に滞在した。そのなかで、ハイデガーの主著である『存在と時間』に関する、ドイツの哲学者ハンナ・アーレント宛の長い書簡の全文（22ページ）を手書きで写した。この調査の後、私はヒルデスハイムでの学会発表を控えていたため、この調査は発表前の日程で行った。また、助成対象の調査に引き続いて9月15日には、パリのINALCOにおいてフランス語で研究発表を行った。